

「もちろん。智佳の好きなように動いて」

「ああっ、嬉しい！ んっ、んっ……はううん……」

少年の許可を得ると、智佳が艶めかしく腰をくねらせはじめた。毎回のように女性上位の体位でしているおかげか、すっかり動きがこなれている。

「ああ、ああんっ……翔太、翔太……んんっ、はっ、ああっ、いいよお！」

快感を貪り、ナース候補生が激しく喘いだ。その腰の動きが、次第に大きくなっていく。

「あああんっ！ あっ、うっ、ひゃあああんっ！ これ、いいっ！ あうっ、すごく感じて……きやううううんっ！」

大きなバストを少年に押しつけた少女が、腰を動かしながらいちだんと大きな声で鳴いた。

「おいおい。そんなに声を出したら、誰かに聞かれちゃうかもしれないぞ」

「ああっ。そ、そうだった……んんっ、でも……でも……あふううう……んうううう……ああ……」

声を抑えようと、あわてて腰の動きを小さくする智佳。だが、今度は十分な快感を得られなくなつて、なんともどかしそうだ。

ところが、代わりに肉棒への締めつけがきつくなってきた。

「くうっ……ち、智佳、そんなに締めるなよ」

「あんっ、違う……違うのお、あふううっ……わたし、ああん、勝手にい……」

長い髪を振り乱し、少女が言いわけを試みる。おそらく、動きを無理に抑えたぶん、肉体の内側に反動が来ているのだろう。もつとも、野外でのプレイという背徳感が興奮につながっているのかもしれないが。

ペニスへの刺激が増したことで、翔太ももう己の興奮を抑えることができなかった。少年は、きつく抱きついている智佳の upper body を引きはがし、欲望の赴くままにふくよかなバストに吸いついた。そうして、屹立した乳首を音をたてて荒々しく吸いあげ、舌でチロチロといじりまわす。

「あっ、もう……んんっ、そんな……あんっ、声が出ちゃ……うううんっ……翔太の……あはん、イジワルう」

智佳が背を反らし、甘い声で嬌声をあげる。しかし、そう言いながらも彼女の腰の動きはとまらない。

さらに、膣のうねりも大きくなって、竿への刺激が強まる。こうして突起を刺激すると、身体の内部まで呼応するのがなんと面白い。

翔太は、柔らかなふくらみに顔を埋めながら、なおも乳首をいじりまわした。

「あううっ！ 翔太、もっど……くううんっ！ もっど、もっどしてえ！」

よりいっそうの快感を、智佳が求めはじめる。

しかし、そんなことをしているうちに、翔太のほうにも「思いきり動きたい」という欲求が湧きあがっていた。

とはいえ、ここは木のベンチだから、ベッドのように下から突きあげるのが難しい。まして、まだ片足が使えない状態なので、動ける範囲にも限界がある。

「智佳、身体の向きを入れ替えよう」

少し考えた翔太が、乳房から口を離して言うと、

「あんっ……えっ？ どうするの？」

と、少女が首をかしげた。

「智佳がベンチのほうに来て。それで、膝立ちになって座るんだ」

少年の指示に従って、智佳がいったん腰をあげて肉棒を抜くと、ベンチに乗る。しかし、板の奥行きがそれほどないため、膝で立つとややバランスが悪い。

翔太は、少女とお互いを支えるようにしながらどうにか体を入れ替え、ギプスに固められた右足をベンチに乗せた。そして、智佳を抱きしめるようにして身体を密着さ

せる。

再び、制服をたくしあげると、少年はペニスをナース候補生の秘部にあてがった。それだけで、少女の口から「あんっ」と甘い声がこぼれる。

骨折のせいで、翔太は今まで基本的に女性上位で挿入してもらっていた。こうして自ら相手に分身を合わせるのは初めての経験なので、まるで初セックスのときのような緊張感を覚える。

割れ目をしっかりと確認すると、少年はゆっくりと智佳の内部へと一物を侵入させた。

「ふあああっ！」

翔太の挿入を、看護科の少女が大きくのけ反って受け入れる。その上体が、座っても外を見られるように低く作られている壁の外側にはみだす。だが、壁に寄りかかったことで、看護補助の少女は一物を受けとめることができるようだ。

奥までしっかりと入れて子宮の存在を確認すると、翔太は突きあげるように動きはじめた。

「ああっ、翔太！ す、すごいっ！」

たちまち、悦びの声をあげる智佳。

左足だけを地面についでいるやや不安定な体勢だが、右足をベンチに置いた対面立



位のようなこの形なら、少年はどうか腰を自由に動かすことができる。

初めて腰が自由になった興奮もあって、翔太はナース候補生の内部を荒々しく突きあげた。

「あんっ、あんっ、あんっ！ 翔太、好き、はうっ、好き！ ああっ、いいっ、それ、いいのお！ あはあああんっ!!」

誰かに見られる不安など忘れてしまったのか、奥を突くたびに智佳が激しく喘ぐ。

翔太のほうも、すでに快感を貪ることに夢中で、「見られてもかまわない」くらいの開き直った心境になっていた。

少女の喘ぎ声を聞きながらズンズンと奥を突きあげていると、やがて膣道が射精をうながすように収縮しながら、肉棒にきつく絡みついてきた。

それとともに、少年の腰にも切羽つまった熱い感覚がこみあげてくる。

「くうっ……智佳、そろそろ行くよ」

「あたしも、もう……翔太、一緒に、一緒にい！」

ナース候補生の少女の求めに応えるため、翔太はストロークを小刻みなものに切り替え、子宮口をノックするように奥を何度も何度も突いた。

「あっ、あっ、当たって……奥で当たってるの……ああっ、わかるう！ あたし、も

う……はああっ！」

智佳の声のトーンが、一オクターブ跳ねあがる。そして、次の瞬間。

「んくうううううううっ!!」

少女が大きく身体を反らして、エクスタシーに達した。しかし、さすがに恥ずかしいのか、口に手をやって絶頂の悲鳴をあげるのだけはどうにか抑える。

同時に膺がきつく締めまり、それが少年の限界を突き破った。

翔太は「くうっ」と声をもらすと、少女のなかに大量の白濁液を注ぎこんだ。

「ああ……出てるう……翔太のセーキで、あたしのなががいっぱいいい……」
惚けた表情でつぶやきながら、智佳が精をしっかりと受けとめる。

スペルマの放出が終わって、翔太はナース候補生の身体をしっかりと抱きしめた。

「智佳、好きだよ」

「あたしも……翔太が好き。大好きよ」

絶頂の余韻よゐんに浸った顔のまま、智佳も少年の体に手をまわしてくる。

最愛の少女のぬくもりに包まれて、翔太はなんとも言えない幸せな気持ちにいつまでも酔いしれていた。